

# 美香ちゃん

発行：青木美香後援会  
事務局：南極昭和基地  
編集責任：小元久仁夫

## 創刊号発行にあたり

越冬成立後まもなく、夕食の席で安藤隊員から「青木美香後援会を作ろうではないか。」という提案があり、全隊員の賛同を得て、後援会は誕生した。

その会長に、まさか私が選ばれようとは、全く思いがけないことであつた。たぶん、チョンガー最年長老（と言ってても若干二十八才であるが）とということが、会長たるべき人物の第一条件であつたに相違ない。

東京出港後まもなく、船が揺れ、隊員公室に飾つてあつた青木美香さんの写真が、ガラスを破つて床の上に転がっていたことがあつた。それを、早起きの私が拾い上げたことがあつたが、このことが今日の会長選出に連なつていたとは、神ならぬ身の知る由もないことであつた。

成瀬さんの文にもある如く、青木さんは極地部を訪問している。その時、隊員の中には彼女の美しさに魅せられて、サイン入りレコードを買った人達がいる。私がその日極地部に着いた時は、ちょうど青木さんが帰られた後であり、彼女の移り香が部屋の中に漂っていた。



会長 小元久仁夫

レコードのジャケットの写真を見て、私は青木さんのことを素直で心の優しい女性という感じを抱いた。そして、この感じは、その後青木さんからの電報（掲示済）からも分かるように、立証されたのである。

「声の便り」での青木さんの声が、甘く優しく聞こえたのは、身びいきだったろうか？ 今年十一月『ふじ』が東京を出港するまでの間、なつかしい声の聞けないことは残念である。

来年日本へ帰った時、青木さんは出迎えてくれるだろうか？ そして、その時の青木さんは…？ こんな事を考えていた中、私は眠りの世界に入る。

どうぞ向こう一年間、よろしくご支援のほど、お願い申し上げます。  
(会長 小元)

## 会誌発行に寄す

## 彼女とボク

「彼女とボク」と副題を書いてみたが、本心は「ボクの彼女」と書きたいところなのだ。だがこう書くと、会員諸兄の袋叩きに逢うかもしれないので、今日のところはひとまずこれで。

さて、彼女がいつ頃ボクの前に現れたかは定かでないが、昭和四十一年の春頃と思う。会員諸兄の大方よりは古い馴染みというわけだ。ただ、彼女にボクのイメージが、いつ頃からどんな風に焼きついたか知る由もないのは、残念である。その頃、あの古ぼけた極地研の二階が、彼女が来るとパツと華やいだものだ。そして、いつも熱心な南極ファンの一人として、いやむしろ身内のごとして、今基地にいる。○さんはどうしてるかしら。」と心がけてくれたものだった。その彼女が、昨年秋には歌手としてのタレントを更に加え、一段と成長したのには驚いた。今度帰ったら、更にびつくりする位にキレイになって、新しいタレントが加わって

いてほしいものである。

幸いに彼女の家は上野、ボクのところに近いから、帰ったらまた何度も逢えると思うと、楽しくて楽しくて…。他の会員諸兄には気の毒なんだし、仲間割れはしたくないんだが「現実にはキビシイ」。まあ我慢してもらいたい。そして、ボクのイメージをくつきりと焼きつけてやるつもりだ。

(楠 宏)

## 後援会を育てよう!

美香ちゃんの後援会が出来て早や三ヶ月経った。その間に、美香ちゃんいろいろな様子が分かり、漸く後援会らしい活動が出来るようになったのは、御同慶の至りである。

何しろ男ばかりの世界で、これといった甘いムードもなく、日夜観測活動に明け暮れている我々であるので、「美香ちゃんの後援会を作ろう」という動議は、ある意味で大きな気分転換になった。内地から送られて来る唯一の女性の声は、美香ちゃんそのものであった。

しかしながら残念なことには、「一、三

の人を除いては、美香ちゃんに逢った人がなく、その大半は送られて来る声の便りの感謝と、まだ見ぬ人への期待と励ましが入り混じったものであった。その間、数回の交信の結果、皆さんの支持を仰ぎます…」から「内地ではスケスケルックがはやっています…」と、日に日に気心は通じ、後援会としての体裁を整えるに至った。けれども、私共の心を最も強く打ったものは、美香ちゃんの最初の返信「この度の計らいに心から感謝。嬉しさと胸が一ぱい。本当に有難う。」という電文のくだりであろう。

聞くところによると、美香ちゃんは映画スターであり、歌手であり、声優で、目下その道に真面目に精進していると聞く。我々のような地味な研究者ではなく、いつも人前に立ち、厳しい競争に打ち勝っていかねばならぬ世界に生きている人である。それだけに、他にも後援会はあるだろうが、それ以上に我々は美香ちゃんを我々のものとして、より多くの声援を送りたいものである。

「南極にいたから、一時的にこうであった。」ということではなく、何時まで

も『南極の恋人』として、美香ちゃんが大成してゆかれる姿を見てこそ、初めて我々が南極に来ていた喜びを味わう時であろう。(蜂須賀 弘久)

### 南極のシンパ

ぼくは、自分がたいへん『おくて』であることを、南極に来て発見した。十代の若者が役者や歌手に憧れ、ファンレターを出す気持だが、やつと今頃になって分かってきた。もちろん昔から『〇〇歌手ファンの会』などに興味を持っていたし、『明星』とか『平凡』などという雑誌の中で、田舎から出てきた娘さんが、有名な歌手と肩を組んで写真を撮っているのを見て、ファンの会の御利益がどれほど偉大であるかをも、良く知っていた。

「青木美香後援会」がこの昭和基地に出来たことは、このような僕にとつて、非常に嬉しいことである。政治家やジャーナリストが南極事業に興味を持つとき、そこには僕たちの心とは異質なものが入り込んでおり、不愉快である。しかし、多分異質であろうけれども、青木美香嬢が僕たちに寄せてい

る関心は、僕たちを不愉快にはさせない。この美しい南極事業のシンパをみんなで大切にしよう。(安藤 久男)

### ミカよ

### タンゴを踊ろうよ

トレンチコートがよく似あう女だ。羽田を出る時を思い出すと、笑いが込み上げて来る。二人で車に乗り込む時、ポーリンの髪の毛が天を突き、成ちゃんが「オノレ！」と一言。

よく越冬中耳にした言葉だ。そんなことを思い出している中、車は1号線の銀座ゲートを出た。並木通りの入口で降りて、新橋の方へしばらく歩くが、一年前までよく行った店がない。今浦島だ。しようがない、今日はみんな美香に任せちゃえ！ 結局、ある高級レストランでまず食事をすることになった。

今までなら、多少抵抗のある所だが、南極でナベさんにマナーを教わってからは自信がついたのか、スーツと入っていきけるから不思議だ。あらためて彼女に「声の便り」のお礼を言う。だんだん彼女に魅かれていく。踊りに行くとういうことになり、赤坂

に向かう。彼女は背が高い。これじゃジルバをやってもゲタでも履かなきゃやせない。タンゴもダメ、ゴッゴを踊る。南極で出た腹が苦しい。早々に切り上げる。下町娘には下町に置くのが一番と思いい、浅草に出る。吾妻橋を渡り、川沿いに言問に出る。風に吹かれた彼女を見てみると、ずいぶん前から知っているような気になってきた。ズズビズズビズバア、夜が更ける。

別れる時、「君の歌はあまりいただけないから、考えたら...?」と言うと、「今度逢う時に返事します。サヨウナラ。」

(小倉 紘一)  
【編追い】ミカちゃんゴメンナサイ



冬の昭和基地

# 美香さんに会った時のこと

私が青木美香なる女性に会ったのは、唯の一度であります。会ったというよりは、見かけただけと言った方が、正確でありましょう。

それは、夏も間もなく終わろうとしているのに、まだまだ暑い日が続いていた頃でした。その日も風のないジツトリとした暑さが、仕事をやる気力をそぐ様に、極地部の部屋の中に充満していました。食堂で味気ない昼食を済ませた後、私は極地部のあの大部屋の途中にポツンと座り、何やら書類を書いていたのです。隊員の殆どは外出歩き、その時、私他には通信のAさんだけがいたように思います。小さい時から十数年間も暮らした東

## 南極太郎

ポーリン作



京ですが、この夏の暑さは何にも代えられない苦痛でした。あゝ早く仕事を済ませて札幌へ帰りた。今度、札幌へ帰ったら...という楽しい想像が、私の頭をかすめたりしていたのです。その時です。木造の階段をコツコツと登って来る足音が聞こえたのです。ハイヒールの音だな、誰だろう？ 極地部の女性だったらサンダルを履いている筈だな。そんな事をボヤーと思いつながら、何となく扉の方に眼を向けました。

「Mさんいらっしやる〜。よく響く声でした。そこに立っているのは、スラリと背の高い女性でした。緑色のノースリーブのブラウスを着ていたように思います。ミニのタイトスカート

が良く似合っていました。「綺麗な人だ。」そう思った瞬間、気の弱い私は、胸の動悸が激しくなりました。

「はい、奥にいますか？」  
私は、慌ててそれだけ言うのがやっとでした。彼女は軽く微笑みながら、奥の部屋へと入って行きました。私は後姿を観察することも忘れませんでした。歩き方も洗練されているし、二十代の前半にも見えるし、三十チヨットにも見える。「何者だろうか？」そんな事を思っていると、奥の部屋から親しげな話声が聞こえてきました。ムツツリのMさんが声高らかに笑っているのも聞こえます。

「誰だろう。」極地部にMさんを訪ねて来るのなら、文部省か。いや明らか

に違う。それでは生命保険の勧誘か？ いや違う。親し過ぎる。あのあか抜けの仕方は、普通の女性とは違うところがある。それではバーかキャバレーのツケの請求か？ 違う。それだったらあんなに嬉しそうに話す筈がない。

そうか！ 分かった。やっぱりこれ

はMさんの〇に違いない。ウーム意外だ。だけど、Mさん位になれば一人や二人いたっておかしくはない。やるなし。さすがだ、チキシヨ、オノレ。その時私は、あんな美人を友達に持っているMさんに、軽い嫉妬を抱きながらも、Mさんの実力をあらためて認識したのでした。

その翌日のことです。私は彼女が青木美香さんというアナウンサーであることを知ったのでした。(成瀬 廉二)

## 往復信記録

長い間、南極向けの放送、本当に有難う。隊員一同なつかしい肉親や知人の声を聞き、どんなに元気づけられたことでしょう。こちらは、オーロラ的美しく見える静かな夜とブリザードの荒れ狂う日とが交互にやって来ます。私達は今、秋の夜長を利用し、来月二一、二二日のミッドウィンター祭の準備を進めています。もう「声の便り」は聞けなくなりましたが、貴女からの「電報」と「会誌」で私達は祖国を偲び、元気に頑張ります。美香ちゃんの誕生日をお知らせ下さい。

(五月一七日 発)

お便り有難う。三月一日生まれ、本名寿美です。皆様お元気そうで、安心しました。吉田さん三九。

(五月二二日 受)

お元気ですか。こちらは毎日太陽のない日が続いていますが、一回元気で。さて、遅ればせながら後援会誌(季刊)は、隊長、蜂須賀、安藤、小倉、成瀬、浅野、小元寄稿により、六月中旬に創刊号発行となりました。内容を全てお知らせ出来ないのが残念です。私達は毎週古い映画を見て、故郷を思い出していますが、今日日本で流行している歌、言葉、スタイルをお知らせ下さい。一、次隊も発表になり、私達は一日も早く貴女の声の聞ける日を楽しみにしています。

二、日はミッドウィンターのお祭り。祝電をお待ちしています。

(六月一八日 発)

お元気ですか。会誌発行ご苦労様。今流行はスケスケルック(中が透けて見える服。バック)。言葉は「もうれつ」。歌は失恋もの沢山。ミッドウィンターおめでとつございます。美香のプレゼント「南極の恋人」送ります。そちらにレコードあるでしょ。

帰国するまでに覚えてね。帰ったらコーラスしましょう、楽しみに。

(六月二〇日 受)

## 編集後記

後援会が発足して三ヶ月後に、ようやく待望の「青木美香後援会誌」の創刊号を発行することが出来た。ここまでが簡単なようで仲々大変だった。まず、ご多聞にもれず原稿の集まりが悪いこと。編集局長や事務局長を公募しても(Sテントピックス 九三)、誰も名乗りを上げてくれなかった。

こんな訳で当初の月刊という予定が大幅に狂い、とつとつ季刊となった。そんなある日、成瀬隊員から次いで小倉隊員から玉稿が届いた。創刊号発行に当たっては、何か一言、あるいはカットでもよいから、全隊員からの寄稿を掲載したと思っていた。残念であった。

雑音の中からではあったが、遠い日本から私達のためになつかしい妻や子の、そして知人の「声の便り」のお礼に、是非とも次の機会には、出来るだけ多くの人達からのご寄稿をお待ちしています。最後に、今回ご寄稿頂きました方々に、厚くお礼を申し上げます。

(P)